

「百瀬文さんと村田紗樹さんの作品について」 vol. 1

収録日：2013年2月20日

収録場所：switch point

参加者：百瀬文×村田紗樹×森田浩彰×永田絢子×富井大裕

進行：末永史尚

(音楽)

(音声フェードイン)

末永「えーっと、末永史尚(すえなが すみなお)です。一人一人ちょっと、名前を言って下さーい。」

森田「森田浩彰(もりた ひろあき)です。」

村田「村田紗樹(むらた さき)です。」

百瀬「百瀬文(ももせ あや)です。」

永田「永田絢子(ながた あやこ)です。」

富井「っちょっちょ...なんやっけ...」

末永「いや、富井君も行きましょう(笑)」

富井「富井大裕(とみい もとひろ)です。」

末永「ふふっ...はい(笑) えっと、今回はえーっと...村田紗樹さん、主にえっと、村田紗樹さんと、あと百瀬文さんの作品について話をします。で、えっと...村田紗樹さんは今年造形大を卒業して、えーっと.....で、まあアーティストです。で、百瀬さんも、えっと今度ムサビの、ムサビの...えーっと...大学院を、出たばかりのアーティストです。で、二人の修了作品と卒制でそれぞれこう...、えー...耳が聞こえない...人、を、えーっと...題材とした、と。耳が聞こえない人とのコミュニケーションを題材とした作品を作っていて、で...それぞれちょっとこう...偶然の一致というか二人ともこう、この同じタイミングでそういう作品を作ったって事にちょっとこう、僕が興味を持ったので、何か二人にお互いの作品を観てもらって、で...そのそれぞれの作品について話してもらおう機会を作ったらどうだろうか。という事で今回企画しました。で...加えて、ま、えっと村田さん...が造形大で勉強していた時に、まあ非常勤講師で来ていた森田さん...ふふっ(笑) ...も、あの、ずっと、その...学生の中の制作も見ていた事だし、その、サポートでちょっとこう...コメントしてもらいつつ、えー...永田さんもこう...えっと...それぞれのこう...、」

永田「(笑)」

末永「状況を... (笑) ...つぶさに見ていたので、えー...コメントしてもらいつつ、という事で、えー...このメンバーで、集まってもらってます。」

富井「永田さんがどういう人かってのは...」

末永・永田「(笑)」

末永「えー...じゃあ...、」

永田「どうなのでしょう...、」

末永「語って下さい(笑)」

永田「あー、何か、自己紹介的なんかは出たりとかしますか？」

末永「ん？」

永田「なんか...、」

富井「ポッドキャストだからあんまり...ね。」

末永「いきなり入るんだよね。いつもね。」

富井「うん、そう。」

永田「あー...、そうなんだ。」

富井「こんな事をさ、」

永田「あー...」

富井「いつ行われたただとか。」

永田「あー、なるほど。」

富井「軽く。」

永田「軽く... (咳払い) ...あ、でもまあ、今日呼んでもらえたのは一応百瀬さんの作品を私が、まあ前から面白いなあと思っていて、」

富井「うんうんうんうん。」

永田「で、えっと一...、まあ初めて観たのが、まあ卒業制作展だったから2年前なんだけれども、まあその後の、新宿眼科画廊での個展を観てて、更にこの間の修了展の作品を観て。で、何かそうやって流れの中で見て行って...、でまあ、今回の作品についてもいろいろ...うん、なんか考える事も多いし、で、今日は、森田さんが村田さんの側に付くんだったら...」

一同「「(笑)」」

末永「セコンドという形で(笑)」

永田「そうそう... (笑)」

永田「なんか話ができたなら面白いんじゃないかな、と...思っています。」

一同「はい。」

末永「じゃあえっと...、でもそっか。んっと、どっちからいこうか？えっと、どうしようかな...。それぞれの作品についていっぺん語った方がいいのかな？」

百瀬「自分の、ところですか？」

末永「うん、自分の作品の仕組みというか。」

百瀬「ああー...。」

末永「うん。」

百瀬「じゃあ、映像観た順で、村田さんから。」

村田「はい。」

末永「うん。」

村田「えっと...私は、えー...なんですかね。インスタレーション。インスタレーションで、えっと...、映像と音声のインスタレーションとして作品を作っていて、で、空間の中に教室一部屋...ん、教室の中半分を使ったんですけど、えっと、教室の中に、真ん中に壁が立っていて、その壁を通過して、えっと、向こう側の2面スクリーンで投影されているえっと、空間に行くんですけど。えっと...片方のスクリーンには、男性が映っていて、片方のスクリーン...もう片方のスクリーンには女性が映っていて、で、男性の方...えっと、映像を観ているとわかるんですけど、男性の方が聴覚障害...耳が聞こえない男性だっていうのがわかって、女性の方も、こう...映像を観ていると、目が見えない女性だっていう事がわかります。で、えっと...、ど、どう説明すればちゃんと.....」

末永・村田「(笑)」

末永「でも、ま、今の通りで、だいたい状況は説明できてるかな。」

村田「はい。」

末永「うーん...、ま、二人がこう、会話してるようにも見えるし、」

村田「そうですね。」

末永「うん。」

村田「えっと、基本的には二人は実際に会ってなくて一、」

末永「うん。」

村田「私と、その男性でしゃべって。で、別の日にまた女性と私でしゃべって、それを映像として記録したんですけど。その映像から、私の声を消して、えっと.....、その男性と女性のそれぞれの映像からは、それぞれの女性の声男性の声が、ま、男性の方は耳が聞こえないので...手話でしゃべっているの、声は入っていないんですけど。んっと.....、それぞれがしゃべってるように見えて、その空間の中で壁に、投影してあるので、二人が向き合って、それぞれの事をしゃべっているうちに、最初の方は基本的にあんまり...こう...、二人の話は噛み合わないというか、私と、しゃべっているの、その人の、しゃべっている声だけが、どんどん流れていくんですけど。えっと.....、だんだんその二人が会話しているように見える瞬間ってというのがちょいちょい出てきて、」

末永「うん。」

村田「会話してるように見えないかもしれない場合もあるんですけど、その二人の話してる内容が、こう...、繋がる、せつ、接着するような、瞬間的にこう...、交わるような、」

末永「うん。」

村田「瞬間があって、そういう作品を作りました。」

末永「うん。.....えっと、まあ、男性の方だけ、手話で、こう、えっと...字幕が付いていて、」

村田「字幕が付いていて、しゃべっている内容がわかるんですけど、」

末永「うん。」

村田「そういう感じですかね...」

末永「うん。」

村田「あと、えっと...、映像込みではなくて割とインスタレーションも込み、えっと...、映像だけでなく、」

末永「うん。」

村田「インスタレーションも込みで、こう...、あの、作り込、作って行って、壁を...、壁を通るって最初の方に言ったと思うんですけど、その壁の中が暗室になっていて、真っ暗になって、ほぼ何にも見えない状況で、...で、その壁に入る前に、えっと...、指示書、が貼ってあって、「左の」、「向かって左側の壁を信じて歩いて行って下さい」っていう、指示書が貼ってあるんですけど、その、指示書通りに左の壁をさわりながら、歩いていくと、えっと、向こう側の映像が投影、映像が流れている、空間に、たどり着ける事が、できるみたいな構造になっていて、で、その、左の壁をさわって歩くことで、えっと、左に二回曲がるんですけど、それを信じないで真っ直ぐ行っちゃうと、えっと...、通り抜けてしまって向こう側の空間にたどり着けないで、『あれ？結局この、作品は、あの、歩い、歩いて壁を通り抜ける作品だったのか』っていうか、向こう側の空間の、...で、流れている映像を観る事ができずに、えっと.....、そ、そ、そういう作品だったんだと勘違いして、しまう人も、結構...多分、いたと思います。」

末永「うん。」

森田「.....じゃあ、百瀬さん。」

末永「うん。」

百瀬「はい。あ、百瀬文です。よろしくお願ひします。えっと、風邪ひいていて声がひどいんですけど、許して下さい。...（笑）えっと、私が修了で出した作品の中の、木下さんに...あ、いやいやじゃない、『聞こえない木下さんに聞きたいいくつかのこと』と、いう作品で、えー...、25分の映像なんですけど...（咳払い）...、えー...、展示した形式としては、あの...、入れ替え制でやっています...、つまり、最初からじゃないと全部観れないという形を取っていました。途中入場はできないという形を取っていました。映画館と、一緒に...システムというか...、っていう感じで展示をしていました。えーっと、私の場合は村田さんみたいに、その、インスタレーション的な見方と言うよりは、ま、単純に、部屋の中に映像が、映画館のように投影されているっていう、映像を観るための空間、っていう感じで展示をしていました。えー...、その映像の内容なんですけど、その...、私が、木下知威さんという耳の聞こえない人。ま、世間的にはろう者、と呼ばれたり、しますが、ま、耳の聞こえない木下知威さんという、えー...、普段は建築や美術史の研...ん、えっと...、建築史や視覚文化論等の研究をされている方にインタビューをする、という、内容です。で...、ま、私は、最初は...、結構、その、.....ま、何というかな。木下さんに、こう、『何でそんな、普通にしゃべれるんですか？』とか、」

末永「うん。」

百瀬「わりと何だろな、その...会話ができてる事をまず最初、『何でなんですかね』みたいなこと、問いかけるような事を言っていて。で、木下さんは何で私の言っている事がわかるのかっていうと、あの、木下さんは私の唇を読んで、話しているんですね。で、これは映像の中でも言われるんですけど、耳の聞こえない人って、なんかその手話...ってこともできるし、話すことが出来る人もいる。話すことが出来る...のは必ずしも全員じゃないみたいなんですけど。木下さんの場合は小っちゃい頃に...口話教育っていう話すための教育を受けていたので、まず最初に話す勉強を教えられて、大人になってからその手話を勉強して、今彼はどちらも使うことが出来るという立場の人です。」

末永「うん。」

百瀬「で、このインタビューの中では、えー...、私が手話ができないので彼には声を出してもらって、その声は結構その耳が聞こえない人がしゃべっている独特の結構不明瞭な部分とかも...あって、最初はだいぶ聞き取りづらかったんですけど、結構彼とは何回も会っていたので私はだいぶ聞き取れる、聞き取れるようになったんですけど。まあそういった私は割と大きめに口を動かしながら喋る、彼も声を出して喋るといった形で耳の聞こえる私と耳の聞こえない木下さんが対話をするという感じのインタビューでした。で、その話の内容がだんだん...その耳の聞こえない人独特のその、誤読の問題っていう話になっていくんですね。その、どういう事かっていうと、例えばまあその映像の中で言われているんですけど、『タマゴ』と『タバコ』みたいにその口の形、唇の形がここ似ている音っていうものがある。『耳の聞こえる私たちにはそれがタマゴとタバコであることが判断できるけど、耳の聞こえない彼らにとってはそれを見える唇の形でしか判断できないから、そういった誤読の問題が当然生じるんじゃないですか?』みたいなことを私が聞いていて、で、木下さんもいやそういうことは確かにあるんですよ、っていう感じで話がつながっていくんですけど。だんだんその誤読に関する質問をしていく私の唇自体がどんどんノイジーになっていくというか、例えばその『こんにちは』って言うのに...、実は『こんにちは』みたいな音を出し始める。字幕のほうでは正確な音が出ているんですけど、実際に映像の中で発話されている私の唇から出ている音はどんでたらめな、でも唇の形は同じであるという音に変換されていくんですね。」

末永「うん。」

百瀬「これは実際に現場で出ている音なんですけど...。で...、その話している内容と同じ?音がその現場で起こっている。」

末永「うん、うん。」

百瀬「耳が聞こえない人にとっての誤読の問題が実際に私のノイズを含んだ声として、実際話されている内容と私がやってる行為が一致していく。で、最終的には...、その、どうやってそのあいまいなものを記憶するのかという話題になっていく。結局それは、僕にとっての声っていうのはイメージであると。その見えている人の例えば歯であったり、歯の形、唇の形であったり。そういった体からは離れた場所にあるイメージなんだっていう風に木下さんは言うんですね。で、私がそうなんですかって言うんですけど、まあ、その次の瞬間に私の声が...ふっと、映像の中でなくなるんですね。これは実際現場の中で私が音を出さずに、口をパクパクさせているんですけど。これもその、体から音が流れて...抜け殻になってしまうということを実際に私がその場で体現しているっていう、構造になっています。なので...、絵的にはその口をパクパク動かしている私に向かって木下さんは一生懸命声を、出して語りかけているっていう。とても奇妙な部分になって表れていきます。で...、なんかその構造を作るにあたっては、あの、あんまりほかの人に言ったことがないんですけど...、あの...、名前を忘れちゃった。(笑)...、あ、高松次郎の『この七つの文字』をけっこう参照しています。」

一同「おお〜」

百瀬「なんか、ええって結構ビックリされるんですけど。(笑)なんかその...、中で言われていることと、やっていることが一致している。構造を作るにあたってはそれを映像でも出来ないかっていう所から始めています。たぶんそれは私にしかわからないことなんですけどね。(笑)」

末永「いや、でも言われるとわかるよね。うん、納得納得。」

百瀬「たぶん見る側はそういうことよりもっと...、なんだろうな、感情で来るものから身体的でその場で起こるものから引き出されるものの方がけっこう強いのかなって思ったんですけど...、結構、私は作る側からは構造的なところからわりと、作品を探る手つきとしては構造的にやっていますね。出発点はもちろん違う所にはあるんですけど。そんな感じですかね...。ふふ。(笑)」

末永「なるほど...。」

永田「なんか今その百瀬さんがこう...、映像の作品の中で、どういう話題について話したかってこと言ってたじゃないですか？」

百瀬「うん。」

永田「村田さんのほうの話を私は聞きたいんですが...。」

村田「えっと.....？」

永田「どういう内容を実際に女性と男性が作品の中で話しているのかっていう...。」

村田「ああ、内容...。えっとまず最初に7分ちょっとの映像なんですけど。えっとお互いまずは、なんですかね。最初に女性のほうは目が見えないので何かを待っているようにずっと立っていて...。で、向かい側の男性は...、その女性にこう、アピールするように手を振ったりとか、話しかけようとするけど声が出ないけど、こう手を招くように相手の肩を叩くような感じで手を振ったりとか...。あと...、筆談でやるのかなみたいな動作をしようとするけど、でも彼女は目が見えないから、字が見えないし...、みたいな動作をしたりとかっていうのが始まって、...で、女性が1分くらいしてから、あの一、男性が見えないんだけど、えっと、そこにいるのかなみたいな感じの言葉を発するんですね。その彼女の口の動きを見て、えっと、ろう者の男性が、あっ気づいたんだと思って、こんにちは、みたいな感じになるんですけど...、そこから、えっと、お互いの、えっと...、自分の障害について話し始めて。で...、まあなんか障害がある中で人とどうコミュニケーションをとるかとか。コミュニケーションとる上で、ちょっとあの...、困惑することとか困ったりすることとか話し始めて。で、あと...、趣味の話から始まって映画についての話をし始めるんですけど。そこでジャンルの話をしていくうちに、吹き替えの話をし始めるんですけど。吹き替えと字幕。で、その映画の中でも、えっと...、男性の方は手話で喋っているの下に字幕が付いていて、女性の方は目が見えないから声で喋っているんですけど。その映像の中で、実際に...、なんだろう...、実際になってる状況下で、その、映画の...、お互いに字幕と吹き替えの話をしていて。女性は目が見えないから字幕は読めないで字幕の映画はちょっと...、みたいなことを言っていて。男性の方もえっと...、声が聞こえないから字幕のある映画ばかりを見るみたいなどころで。なんか同じような映画の話をしていて、なんかしゃべっているようにも聞こえるんだけど、そこでもやっぱりずれてしまっているみたいな状況を作っていて。で、最終的に、えっと...まあ、その流れていく映像の中で何度か、こう、その二人が交わりかける瞬間があるんだけど、えっと...男性が最後に「さよなら」みたいな感じで手を振るんですが、女性が振り返った瞬間に、男性がその手を振るのをやめてしまって、あの...、目をそむけてしまうみたいな...最後まで、交わりかける瞬間はあるんだけど、でも、交わりきれないみたいところで終る、みたいな。そういう流れで映像になっています。」

百瀬「あれって、作り手の意識としてはフィクションなんですか？」

村田「いやっ...その...」

百瀬「初めはその...やったりとか、けっこう明らかにそういう...そういう台本的なものを感じたんですけど、私は。」

村田「うん...うん。」

百瀬「まあ、導入として...てか、ここに村田さんがいて、彼はこう...、やってるってことは、彼は村田さんの体がそこじゃない前提でこうやって...」

村田「いや、えっと、私が、そのシーンは、私が目をつぶっていて目が見えない状況というのは演じていて...、」

百瀬「あ、そうなんだ。」

村田「で、男性の方に...私に、こう...なんだろう、アピールしてください、というかこう...、話しかけてください、みたいなことを言っておいて、女性の方にも同様に、私が耳を聞こえない...耳栓というか、耳をふさいでおいて、で、その状況で反応してください、という風にしていて、なので、基本的に2人とも最終的に作品になった時に、男性...その...、ろう者の男性と話す構造になる。...えっと、視覚障がい者の方の盲者の方と話す形になるとわかっていて...、でも、私とこうしゃべっていく中で、インタビューをしていって、みたいな、ことですね。」

百瀬「あー...。じゃあ、そういう疑似的な状況を作っている。」

村田「最初の方のシーンで、ですか？」

百瀬「いや、その、村田さんが、それぞれ、耳の聞こえない人、目の見えない人...、（村田さんが話をかぶせる）」

村田「あ、えっと、その真ん中の最初の方だけ目の見えないふり、耳の聞こえないふりをしているだけで、間の...答えているような、話している時は、私の普通にこう...、女性の方は耳が聞こえるので、声でのやり取りをしていて、男性の方は私も手話ができないので、その、私も百瀬さんと同じで...。あの...、最初に質問を筆談でして、その質問をみせた後に、あ、じゃあわかりました、こういうことをじゃあ...喋ろう、というか手話で話そうというのを考えて、男性の方が。で、映像を撮って...、そのあとで、リアルタイムに、すぐに撮った映像を見ながら男性がパソコンとかで、今話した自分の言葉っていうのを打ち込んでおいて、で...、私が編集するときに、その...彼のパソコンに書いておいた、訳というか...、文字上の訳を字幕にして、えっと...編集するっていう方法をとりました。」

百瀬「...なんか、まあ、たぶん、なんで今回私たちが呼ばれているかっていうと、そういう、末永さんがさっき、最初に言った、耳の聞こえない人を中で扱っているということ...。やっぱり、結構、その...コミュニケーションの問題っていうのは、すごい大事で...、たぶん、そこにおけるディスコミュニケーションみたいなことが、二人とも扱っているから、たぶん、なんか、そこについてやっぱり話したいな、と思うんですけど...」

村田「はい...。」

百瀬「なんか、その...なんで、そもそもそういうものを作ろうと思ったか、みたいな...、ところに結構直結するような気がして、そこを聞きたいな、と思ってですね...。」

村田「私はその...大学4年間で、一番最初から、主張...1つのテーマとして主張しているんだけど、その主張が届かない、相手に届かない...とか、気づかれないとか、えっと...、という問題を、えっと...たぶん、テーマにして作品を作っていて、そもそもその問題になったのが、私自身小さいころから、今はだいぶ、こう...なんだろう、よくなったというか、小さいとき声がすごい小さくて、あの...母とかに何か質問されても、こう...質問されて答えたのに、その声が小さすぎて母に届いていなくて、あんたは声が小さいから、その...もし、何か言っていたとしても...、その...相手に聞こえていなかったら、その言葉はないことになってしまうんだよ、みたいなことをよく、怒られていたというか、言われていて...。でも、私としては、あの...ちゃんと声を発しているし、自分の中では、その、自分の意図みたいな、主張みたいなことを発しているのに、それが相手に届いていない、っていうのが...か、悲しいというか、なんで届かないんだろう、とか...、自分の中では大きい声を出しているはずなのに、それが...それ以上あげると言われても、というか、な、逆になんで、届いてくれ...気がつかないんだ、という気持ちがあって、それが作品を作る上で、多分根本的な自分の問題としてあって...そうですね...。でも、声の小ささに限らず、私は割と口下手な方なので、喋っても...、あの...ちゃんと自分の言いたいことがちゃんと喋れているのか分からないし、何を...その...なんだろう...相手に届いているのか分からないっていうのが...なんか、もどかしくて、で、それをきっかけに大学1年生の時とか、1、2、3年ぐ

らいまでは...視覚的なものを使って、すごい、小さかったりとか、細かいものだったりとか、えっと.....、すぐなくなってしまうものとかを、作品にして現象的なものに作品を作っていたんですけど、それだとやっぱり気が付いてもらえないままで、お客さんに、あの...観賞者の方に。で、そのもどかしさから、その、作品を展示するときに、毎日その場において、ずっとその場において毎日お客さんと喋るっていうことが...、私の中で作品の中の一部としてすごく大きなもので。で...えっと...、作品の展示をして...、毎日その場にいられないとか、その、いられない期間っていうのが増えてきて、展示を重ねていくうちに。で、えっと...それ...、そのうちに声自体に、話す声自体に興味を持ち始めて、で、えっと...3年の最後に作った作品で、父親と母親にインタビューする、という作品を作ったんですけど、えっと...私の家庭は父と母が別居していて、私は母と住んでいるんですけど。...母と私と弟で住んでいて、で...、その別居の理由っていうのが別に離婚とか不仲というわけではないんですけど、父の仕事の都合で父だけ都内に住んでいて、私...たちは川崎に住んでいるっていう状況なんですけど、それが小学校の時から、10年くらい...もうずっと続いていて、しゅ、週に1度だけ、日曜日に父親が帰ってくるっていう家族の在り方なんですけど。...えっと...ここで、10年も続けていると、母も父の考えていることが分からなくなり始めたりとか、父がもともと無口なので、週に1度帰ってきたとしても、一言も喋らないで帰ってしまう時があって...。で...そのことについて、別居していることについて、まず一度も父にも母にも聞いたことがなくて、で...あの...ある日、母に別居のことについて、どう思うのか、どう考えているのか、この先も別居を続けるのか...、みたいなことをインタビューして、また別の日に、父にも別居についての質問というか...インタビューをして、で...その父親と母親にそれぞれインタビューした私の声を抜いて、で、えっと...インタビューに答える母の声と...父の声、それぞれひとつひとつの...、1つのスピーカーから、それぞれの父と母の声を流して、で、えっと...お互い、子供である私の質問に答えているんですけど、そのスピーカーから流れている、えっと...、お互いの父と母の別居についての答えが、会話のように聞こえ始める。最初は、えっと...なんだろう...、私のことについて...私の質問に答えているんだ、っていうのがわかるんですけど、だんだんその話が...まじりあい始めて、父と母がしゃべっているように聞こえるみたいな...作品を作って、で...それがきっかけで結構、声...の作品を作るようになって、で今回その卒業制作にあたって、えっと...、やっぱり聴覚障害の方と、えっと...視覚障害の方、お互い耳が聞こえなかったら...視覚でコミュニケーションをとるし...、えっと...、ろう者の方は、ろう者じゃない...、視覚障害の方は...、目が見えないから耳で、音声で...コミュニケーションをとろうとするから...、そのコミュニケーションお互い受け取る側に、えっと...障害があって...、結局その相手の主張とか...言いたいこととか伝えることが受け取れなかったり、通り過ぎてしまうっていうのをういて、...えっと、今回作品を作りました。」

百瀬「なんか聞いてて思ったのは...、なんか結構その...なんか...私と村田さんの、結構その発想の...矢印が根本的に違うなと思って。」

村田「うんうんうん。」

百瀬「なんかその村田さんの場合は、そういう...家族内の、」

村田「はい。」

百瀬「出来事とか...。自分にとって身近な結構...わりと素朴な体験が元にあって、そこでおこるディスコミュニケーションみたいなものを感覚として受け止めたうえで...、そこから耳が聞こえないっていう...、耳が聞こえない人っていうところに興味がつながっているけど、わりと結構私は全く矢印の方向が逆で、」

村田「はい。」

百瀬「なんか私は耳が聞こえない人っていう...ことからまず...なんか...、なんだろう...そこに興味がいつてから、それが結局普遍的な問題である、普遍的なディスコミュニケーションの問題である...、っていう風に繋がっていったところがあって、そこが結構その...展開の仕方が...。矢印の向きが180度違うなっていう感じが...して。」

富井「主題からと形式からで違うよね。」

百瀬「そう。」

富井「多分...村田さんの場合は主題から入ってて。で...百瀬さんの場合、多分どっちにしる主題というか形式はくつつくんだけど...こびりつくんだけど、多分...方向性としては形式への興味があったのかな？」

百瀬「そうですね、なんか多分...彼女が言ってるディスコミュニケーションっていうのは、結構そのなんだろう...、そのメタファーとしてのディスコミュニケーションっていうか、」

村田「あー、そうですね。」

百瀬「内容としてのディスコミュニケーションなんですけど、私の場合物理的なディスコミュニケーションなんですよ。」

富井「うん。」

百瀬「だから実際にこの口から出てる音と...意味との...齟齬みたいな。そういう、文字面で表現できるようなこと。だから結構そこは。」

富井「確かにね。」

百瀬「扱っているものは違うけど、あ、いや一緒だけど。」

末永「うん。」

百瀬「根本的に...。」

森田「面白いのはなんかそのモチベーションの部分の始まり方と、最終的なアウトプットが...、逆になっているというか。僕の印象では、村田さんの方が形式的に見えるし、」

末永「あー...。」

森田「で、実際に僕は結構形式的だと思うんですよ。で、百瀬さんは、えーっと、実際...百瀬さんっていう、まあもちろん村田さんはいるけれど百瀬さんと...木下さんが会話しているっていう、そこは紛れもない本当の事実としてやっぱ映っていて...、で、それに比べて村田さんは、村田さんと...その人が、えっと、話しているにも関わらず、村田さんの存在を消して。で...その、えっと聴覚障害と視覚障害の人が話しているように...、なんか仕組んでいる。」

村田「うん。」

森田「だからそこは当然かみ合わないから...、逆に言えばその...構造がすごくよく、まあ...、もちろん百瀬さんにも形式的なところはあるんだけど、あの...、二人を比べると、えーっと...、その、えー、モチベーションとアウトプットが逆に見えるのはなんか...面白いなと思って。」

富井「自らが出てるっていうのはどうなんだろうね。あれね。」

百瀬「結構それは...私の中の責任の取り方っていうか、誠実な...この題材を扱うにあたって、すごい苦しんだんですよ。...なんかこんなこと言ってもあれなんですけど... (笑)。なんかやっぱり当然倫理的問題だってあるし、なんかそこでどうしたら良いんだろうってなった時に、やっぱり私は自分の体で責任をとりたかったっていうのがまずあって...。そこに自分の体があるっていうこと、その状況を引き受けるっていうのが一個あって...、それはあくまで私の作り手としての問題ですけど。」

富井「うんうんうん。」

百瀬「まあそれが一個あって…。まあさっき私自分のきっかけを話しそびれたのでちょっと（笑）」

末永「あ…、そっか。ぜひ。」

百瀬「良いですか？すみません。（笑）…なんでそもそも木下さんと会ったかっていうと、」

末永「うん。」

百瀬「まあ木下さんが、えーと…、えっとこの間、去年、新宿でやった眼科画廊の展示に来てくれていて…。その時は会わなかったんですけど…。まあ後日感想のメールが送られて来たんですね。で…私、そのメールの中に、僕は耳が聞こえないみたいな…ことが書い、いや違ったかな、まあ調べて…、彼が耳が聞こえないってということが確かだったんですね。でその時結構…私ショックで、なんかその映像ってまあ、映像もあるし、音もあるし…。」

末永「うん。」

百瀬「視覚的な情報と、聴覚的な情報が両方あるメディアだから…、」

末永「うん。」

百瀬「だからその一方、一方が…欠いた状態で起こる体験っていうのと、私が作り手として作っている体験は全く違うはずで…、

末永「うん。」

百瀬「なんか今までそのことを全く意識したことがなかった、っていうこと…。」

末永「うん。」

百瀬「結構そこが割とショックで。」

末永「うーん。」

百瀬「まあ単純に好奇心として一度会ってみたいことがまず一つあって、まあ新宿の、いや新宿じゃない、渋谷のカフェで会ったんですけど、」

末永「うん。」

百瀬「なんかすごい印象的な出来事があって、」

末永「うん。」

百瀬「まあその、…彼が、なんか自分がよく行くカフェに行こうみたいなことで、まあ私の前を歩いて、」

末永「うん。」

百瀬「なんか歩いていたんですけど、彼は結構歩くのが早くて…、」

末永「うん。」

百瀬「私…結構坂道で、息切れして…。（笑）そう、で、すみません待ってくださいって後ろから呼びかけたんですよ。」

末永「あー...。」

百瀬「でも彼は振り返らなかった。」

末永・村田「あー...。」

百瀬「彼はただすたすた歩いていて、」

末永「うーん。」

百瀬「その間1メートルぐらいしかないんですよ...。」

末永「うーん。」

百瀬「結構それがほんとに、ハッとしたというか。」

末永「うーん。」

百瀬「なんかこの世界は、ほんとにこういうみんながシャボン玉のような、なんかこういう膜で覆われて、ほんとそれが触れ合うか触れ合わないかの...、世界で生きているんだなってことが、すごいなんかもう電撃のように、こう目の前に立ち現れたっていうか...それがやっぱり一番強烈な体験で。」

末永「うん。」

百瀬「まあ、そこからやっぱりなにかこの感覚を映像化したいっていう...、って...いうのが一個あって...。」

末永「ふーん...。」

百瀬「で...まあそうやってお話して、まあカフェでは筆談で、まあやってたんですけど。」

末永「うん。」

百瀬「そうやって話していくうちに、中でそういった誤読の問題であったりとか、そういう話もして...。で...このこと自体を...、作品化できないだろうか、って...思ったんですね。」

末永「うんうん。」

百瀬「で、なんかこの依頼をするときに、私、彼にビデオレターを送ったんですよ。」

末永・森田「おお。」

百瀬「... (笑) なんかそのビデオレターがまさしくこの構造だったんですよ。」

末永・村田「へー。」

百瀬「なんか彼、論文とか書いているんで...、私もその論文を読んだので、あなたの論文とても面白かったです、みたいなことを言って...。」

末永「うん。」

百瀬「実は私の...なんか、協力してもらえないかと思って...いますみたいな...、まあ手紙を...、送っ、手紙でまずそれを書いて、」

末永「うん。」

百瀬「よろしければこのDVDを見てもらえませんか？みたいな。（笑）ことでDVDをつけたんですね。そのDVD...、まあ...その構造を持っていて、」

末永「うん。」

百瀬「まあ途中でこう...ノイジーになるみたいな。」

末永「うん。」

富井「あー...。」

百瀬「って感じで見てもらっていかがでしたか、実は私は...、」

末永「うん。」

百瀬「途中から...、」

永田「そこでネタばらししてるんだ。」

百瀬「彼は全て知っていて、構造自体は。」

末永「うーん。」

百瀬「実はこういうことしていたんですってことを言ってそれで依頼を...したんですね。」

末永「うん。」

百瀬「彼がどう...、それを了承してくれるかっていうのはやっぱり大事な問題だと思ったし、...で彼は返事をくれて...とても面白そうだから一緒にやりましょうって言ってくれたんですね。」

末永「うん。」

百瀬「で、彼は、この作品の中では...どこで音が変わるとか、どこで音が消えるのかっていうのは、全然知らされてはいないんですよ。」

富井「あー...。」

末永「うん。」

百瀬「作品の構造は知っているけど...タイミングは知らされていない。」

（音楽フェードイン）

富井「彼にとっては、変わらない世界なんだね...。」

百瀬「そう...。知らされていないし、確かめることもできない。」

末永「うん。」

（音声フェードアウト・音楽）